

富山市内の小・中学校の児童・生徒数の現状について

1 児童・生徒数の推移および今後の見込み

(小学校)

	平成 25 (2013) 年度	平成 30 (2018) 年度	平成 31 (2019) 年度 (見込)	平成 33 (2021) 年度 (見込)	平成 35 (2023) 年度 (見込)	平成 57 (2045) 年度 (見込)
児童数	22,004	20,395	20,190	19,973	19,868	16,014
学校数	65	66	66	66	66	—
過小規模校 (5 学級以下)	5	6	7	7	10	—
小規模校 (6～11 学級)	27	29	30	29	28	—
適正規模校 (12～18 学級)	23	22	20	21	19	—
大規模校 (19～30 学級)	10	7	7	7	7	—
過大規模校 (31 学級以上)	0	1	1	1	1	—
その他 (分校)	0	1	1	1	1	—

※ 平成 25 年度、平成 30 年度の児童数は、5 月 1 日現在のものである。

※ 平成 31～35 年度の児童数は、平成 30 年 5 月 1 日現在の住民基本台帳における子どもが、居住している校区の小学校に入学するものとして見込んだものであり、転入・転出は考慮していない。

※ 平成 57 年度の児童数は、「平成 29 年国立社会保障人口問題研究所の将来人口予測 (出生中位・死亡中位) における年少人口予測値」を基に、2015 年比△25%として算出した。

※ 平成 26 年度から浜黒崎小学校松風分校を開校した。

(中学校)

	平成 25 (2013) 年度	平成 30 (2018) 年度	平成 31 (2019) 年度 (見込)	平成 33 (2021) 年度 (見込)	平成 35 (2023) 年度 (見込)	平成 57 (2045) 年度 (見込)	
生徒数	11,143	10,606	10,518	10,447	10,137	8,322	
学校数	26	27	27	27	26	—	
過小規模校 (2 学級以下)	0	0	0	0	0	—	
小規模校	(3～5 学級)	2	3	3	2	3	—
	(6～11 学級)	12	11	12	13	10	—
適正規模校 (12～18 学級)	7	10	7	7	8	—	
大規模校 (19～30 学級)	5	2	4	4	4	—	
過大規模校 (31 学級以上)	0	0	0	0	0	—	
その他 (分校)	0	1	1	1	1	—	

※ 平成 25 年度、平成 30 年度の生徒数は、5 月 1 日現在のものである。

※ 平成 31～35 年度の生徒数は、平成 30 年 5 月 1 日現在の住民基本台帳における子どもが、居住している校区の中学校に入学するものとして見込んだものであり、転入・転出、学校選択制は考慮していない。

※ 平成 57 年度の生徒数は、「平成 29 年国立社会保障人口問題研究所の将来人口予測 (出生中位・死亡中位) における年少人口予測値」を基に、2015 年比△25%として算出した。

※ 平成 26 年度から北部中学校松風分校を開校した。

※ 平成 34 年度から八尾地域統合中学校を開校予定。

2 小規模校及び過小規模校における教育

○よさ

- ・一人ひとりの子どもに目が届くので、きめ細かな指導が可能である。
- ・学習や学校行事等において、子どもたちの活躍の場が多い。
- ・他の学年や地域の方との交流活動がしやすく、親交を深められる。

○小中学校における共通の課題

- ・友達や教職員の多様な考えに触れ、認め合い、協力し合うことを通して、社会性や規範意識を身につけさせることが、今後ますます重要となる。しかし、クラス替えがなく、同じ友達と卒業まで過ごす小規模校などでは、こうした機会が得られにくい。
- ・同学年の児童が数名となる場合があり、体育の時間の野球やバスケットボールなどの団体競技や音楽の時間の合唱や合奏などが実施できない。
- ・経験年数、専門性、男女比等、教員をバランスよく配置できないため、教員同士の切磋琢磨する機会が少なくなる。

○小学校及び中学校における個別の課題

(1) 小学校

- ・5学級以下の過小規模校では、教務主任が学級担任を兼務することとなり、負担が大きくなるとともに、子どもと向き合う時間が十分確保できなくなる。
- ・1つの学年の児童数が少ないため、2つの学年を1つにした学級（複式学級）となることがあり、その担任は、2つの学年の授業の準備、会計事務等を行うこととなるため負担が大きい。
- ・複式学級となる学校には、市の事業として、授業のサポートを行う学習補助員を配置しているが、県による教員の増員（加配）はなく、担任が授業の準備をしたり、児童のノート等を点検したりする時間の確保が難しい。

(2) 中学校

学級数に応じて配置される教員の数が少ないため、

- ・すべての教科の教員がそろわないことがあり、一部の教員が、専門以外の教科の授業を行わなくてはならない。
- ・一人の教員にかかる業務量が多くなるなど、負担が増加し、授業の準備や評価にかかる時間を十分確保することが困難となる。
- ・開設できる部活動の数にも制約が生まれ、生徒が希望する部活動を設定できない場合がある。